学会消息

◇国際人間工学会

杉山貞夫教授は去る8月1日から5日の間、オーストラリア、シドニー市のシェラトン・ウエントワースホテルで開催された国際人間工学会連合の第10回大会に出席した。それに先立ち開催された同連合理事会には前会長として出席、人間工学的技術の将来の重要性に鑑みその活発な活動が要請されている現状より、人間工学の各分野における国際的交流を計ることの重要性につき懇談、また、我が国人間工学会でも1990年夏、京都において開催される国際応用心理学会大会の前に京都工芸繊維大学秋田宗平教授（現国際人間工学会連合日本代表理事）を大会長、龍谷大学経営学部和多田淳三助教授（本学部非常勤講師）を大会事務局長として、マクロアーゴノミックスを中心とした組織計画と運営における人間工学的配慮に関する国際会議を開催することが同理事会で正式決定された。

◇組織研究についての
オーストラリア及びパシィフック研究者の会議

昭和63年4月5～6日、「組織研究についてのオーストラリアおよびパシィフック研究者の会議」が香港大学において開催された。本学からは萬成博教授が本会議においてロバートM.マーシュ教授（米国ブラウン大学）と共同で"Organizational Change in Japanese Factories: 1976—1983"を報告した。この論文は、S. R. Clegg and S. G. Redding (ed.), *Capitalism in Contrasting Caltures* (1988) に掲載せられる。

◇ポール・ロワイヤル、パスカル学会

今秋、日本における最初のポール・ロワイヤル、パスカル学会を東京大学山上会館（9月27～29日）で開催した。今後関西学院大学、および、関西学院千刈セミナーハウス（10月7～8日）で開催予定であるが、本学の森川　甫教授はこれに先立ち、テーマの検討、研究発表、講演などのプログラムの協議をメナール教授、セリエ教授とパリ第4大学などにおいて派遣期間中、数度にわたり行い、また、ポール・ロワイヤル学会総会（1988年1月16日開催、於．元ポール・ロワイヤル修道院　パリ）で日本における開催準備状況を報告した。

◇日本都市社会学会

日本都市社会学会は東京都立大学が開催校となって7月14日～16日の3日間、「こまばエミナース」と東京港の「東京都職員研修所」で開かれた。

第1日目（7月14日）は「こまばエミナース」において、午後2時から「自由報告」が行われた。ついで4時30分から「特別セション——大道安次郎先生と都市社会学」が持たれ、本学の倉田和四生教授が司会となり、磯村英一教授が追悼の講演を行い参加者に深い感銘を与えた。

第2日目（7月15日）は午前中に「自由報告」がなされ、午後は12時から2時まで「ラウンド・テーブル集会」として、3つのグループに分かれて昼食を食べながら3つの著書の合評会が持たれた。その後、5時まで「自由報告」がなされた。

第3日目（7月16日）は9時30分に浜離宮前から乗船して12時ごろまで約2時間あまり東京湾岸を視察した。午後は東京都職員研修所において「シンポジウム——世界都市東京の都心を考える」が開かれ、活発な討論がなされた。

◇日本人口学会

第40回（昭和63年度）日本人口学会は6月3日～5日の3日間にわたって日本大学で開催された。第1日目（6月3日）は市ケ谷の日本大学会館において、午後2時から「開会のあいさつ」のあと、「記念講演」として米国東西センター副総長のリージェイ・チョー博士の「中国の人口——最近の動向と将来への挑戦」と題する講演がなされる予定であったが、都合でチョー博士は不在のまま講演原稿が代読され、そのあと黒田俊夫司会によってチョー博士の紹介と解説がなされ、それをめぐって討論がなされた。

第2日（6月4日）は三崎町の日本大学経済学部において、午前中は3つの部会に分かれて「自由論題」の報告がなされ、午後は「総会」につづいて「追悼講演」が持たれたあと3時から6時まで「シンポジウム——先進国の出生減退をめぐって」が開催された。これには日本、西

欧、北米・オーストラリア・ニュージランド、ソ連・東欧についての発表と活発な討論がなされた。

第3日（6月5日）は午前中は3つの「部会」、午後は2つの「部会」が持たれた。

◇日本地域福祉学会

日本地域福祉学会第2回大会は6月18日、19日の両日、東京の全社協ホールで開催された。大会テーマは「地域福祉の実践課題と条件整備のあり方」であった。現代の社会福祉状況を背景に設立された新しい学会であり、自由研究、課題研究ともに意欲的な報告・討議が展開された。本学部からは高田真治教授が参加し、「在宅福祉サービス供給システムの分析視角」（共同研究）について報告した。

◇日本英文学会

日本英文学会の第60回大会が5月21日、22日に名古屋大学において開催。第1日目は4室、第2日目は7室に分れて40人の研究発表があり、それと並行して英文学5部門、米文学3部門、英語学3部門に分れてシンポジウムが行われ、最後にM. H. Abrams氏の講演で締め括った。本学部からは半田一吉教授が出席した。

◇日本言語学会

言語学会は年2回開催されるが、今年度の前期（第96回）大会は6月4日、5日に学習院大学の創立百周年記念会館正堂で開かれた。第1日目は同大学の大野晋教授の「日本語の同系語」と題する講演と、小泉保会長の「空間と時間における直示の体系」と題する会長就任講演があり、第2日目は2会場に分れて18人の研究発表があったが、内容は一般文法的なものから、フィンランド語、モンゴル語、韓国語、ヒッタイト語、チャガ語、ロシア語などにわたる多彩なものであった。本学部からは半田一吉教授が出席した。

◇日本フランス語フランス文学会

1988年度日本フランス語フランス文学会春季大会は、6月4日、5日の両日、共立女子大学（東京）において開催された。個人の研究発表が語学及び各世紀毎の分科会に分けて行われた他、シンポジウムは「フランスにおける現代日本文学の紹介」ということをテーマに行われた。本学部からは森川　甫教授、紺田千登史教授が出席した。

◇日本人間工学会

杉山貞夫教授は去る5月11日から14日の間、広島ガーデン・パレスで開催された日本人間工学会第29回大会に出席した。さらに、同教授は同学会評議員会、理事会に出席。韓国人間工学会会長K. S. Park博士（韓国科学技術院教授）、韓国工業経営学会会長G. H. Yi博士（漢陽大学校産業工学科教授）、南東アジア人間工学会会長Adnyana Manuaba博士（インドネシア・ウダヤナ大学医学部生理学教室教授）等と発展途上国における人間工学的対策について、同大会会長広島大学工学部・長町三生教授を交え懇談、国際人間工学会連合の役割について意見を交換した。また、杉山教授はPark博士およびManuaba博士による韓国とインドネシアの人間工学の現状報告についての講演の司会を行った。

一方、杉山教授は去る7月20日、早稲田大学人間総合研究センターで開催された組織計画と運営に関する研究部会（日本人間工学会）において、「ヒューマン・コンパティビリティからみた作業計画試論」と題する講演を行った。

◇日本新聞学会

日本新聞学会春季研究発表会および1988年度総会が5月28日と29日の両日、水戸市の常磐大学において開催された。第一日のシンポジウムは「大都市周辺におけるメディア」「放送法制の課題と展望」の2つのテーマで行われた。本学からは津金沢聡広教授、芝田正夫助教授が出席した。また本学部出身の東元春夫氏（関西学院高等部）は「移民新聞購読と同化のレベル——在米日系人の調査から」のテーマで個人研究発表を行った。

◇日本社会学史学会

日本社会学史学会が6月25日、26日の両日、帝京大学八王子校舎で開催された。

9つの自由報告、深田弘氏（日本大学）による講演（「J. S. ミルと調和の社会」）、および宝月誠氏（京都大学）・吉原直樹氏（神奈川大学）を報告者とするシンポジウム「シカゴ学派再考」（8人の討論者あり）などが行われた。

なお、総会では、新たに横山寧夫氏（立正大学）が会長に選出されたほか、本学からは高坂健次教授が理事に選出された。

◇関西社会学会

第39回関西社会学会が1988年5月28日、29日の両日、立命館大学において開催された。会員250名、臨時会員42名、計292名の参加者があり、34の自由報告と3つの重点部会「知の社会学」・「社会学に何ができるか—そのパースペクティブを問う」・「ME（Micro Electronics）の社会的影響と問題」が開かれた。

本学からは第2日目の午後に行われた「知の社会学」（前記重点部会）で対馬路人助教授が「科学の周辺」と題して報告した。また、自由報告の部会の司会者としては、第1日目の午後、理論の部会で中野秀一郎教授が、第2日目の午前、労働の部会で西山美瑳子教授がそれぞれ司会にあたった。自由報告発表者は第1日目の午後、「文化」のセッションにおいて、真鍋一史教授が「日本人論の諸命題とその諸機能に関する実証的研究—質問紙調査による接近—」と題する研究発表を行った。

なお、この真鍋教授の発表は米国スタンフォード大学人類学部のハルミ・ベフ教授との共同研究にもとづくものであり、この共同研究に対し関西学院大学から「国際共同研究交通費補助」が与えられたことを付記しておきたい。

また、第2日目の午前、「国家と政治」のセッションで本学社会学研究科研究員・小林久高氏が「権威主義・保守主義・革新主義—左翼権威主義再考—」と題して発表した。

本大会は先の3つの重点部会にあわせて200名近い会員、臨時会員が参加し、長時間にわたり活発な討論が行われた。なおまた、本学部へ招待した中国、中山大学の何肇発教授が学会を表敬訪問した際に、学会懇親会において遠藤学部長が同教授を紹介した。

◇関東社会学会大会

第36回関東社会学会大会が1988年6月18日・19日の両日にわたって、日本女子大学で開催された。第1日目は、テーマ部会と自由報告部会がもたれた。第2日目は、自由報告のあと、シンポジウム（①都市社会におけるエスニシティーと異文化、②社会理論のフロンティア）が行われた。本学からは正村専任講師が参加した。なお、今年から学会誌『年報社会学論集』が刊行されることになった。

◇異文化間教育学会

異文化間教育学会第9回大会が昭和63年5月21日（土）、22日（日）の両日、専修大学において開催された。本学からは真鍋一史教授が出席し、『日本「人・文化・社会」論の検証——国際情報としての問題点を探る——』というテーマで研究発表を行った。この発表は米国スタンフォード大学人類学部のハルミ・ベフ教授との共同研究にもとづくものである。

なお、この研究に対して関西学院大学から「国際共同研究交通費補助」が給付されたことを付記しておきたい。

◇ファジィシステム学会

ファジィシステム学会が5月30日、31日の両日、明治大学百周年記念大学会館で開催された。

60余りの一般報告ならびに、菅野道夫氏（東京工業大学）による基調講演「ファジィ理論の目指すもの」、中村雄二郎氏（明治大学）による招待講演「ファジィと新しい科学認識論」、岩井壮介氏（京都大学）による特別講演「システムの変度知能化と人間の類推、情報集約、意思決定プロセスのモデル化」が行われた。次代を担うファジィ理論への期待と関心の高さを反映して、参加総数は373名にも達し、会場は熱気と活発な討論にみちあふれた。本学部非常勤講師の浅居喜代治、田中英夫、水本雅晴の諸氏は当学会を担う有力メンバーであり、それぞれ司会をつとめられた。本学部からは高坂健次教授が参加したが、専門を異にした研究者や一般企業からの参加も多かった点が、本シンポジウムの特色の一つであった。

◇朝日 CAI シンポジウム '88

朝日 CAI シンポジウム '88 は7月27日、28日の両日、京王プラザホテルで開催された。今回のテーマは「情報化社会における教育と人間性」であった。

臨教審答申により、学習指導要領の中学1年生に「情報基礎」という科目が来年度より実施されることが決っており、中高の現場の先生方

がどのように対応するかという課題をもって真剣に参加されていた。本学からは中西良夫助教授が参加したが、内容は「総研ジャーナル」(53号）に詳しく載せる予定である。大学としては6年後、コンピュータ・オリエンティッドな、リテラシーのある学生を受けいれるのに際して、いかにして魅力あるキャンパスにするかが今後の問題となることを痛感した。その方向は、1）24時間開放体制のインテリジェント化したキャンパスの構築、2）一層のCAI化するための横の連絡・連係を密にし、協力体制を構築すること、3）コンピュータ教育で教えられない直接体験、フィールド・ワーク、密度の高いインターアクションのある人間的魅力のある演習・授業を創出することであるように思える。その意味で、この数年間こそが大学にとっても大きな試練の年であるように思える。

◇情報処理学会・研究会

情報処理学会主催のコンピュータと教育研究会が東京・機械振興会館で7月14日に開催された。本学からは、情報処理研究センター・慎本淳子実験助手と本学部・中西良夫助教授が出席した。

CAIのコースウェア開発に関心を持つ者として、発表の多くが徐々にではあるが、次に述べる1から5へと進んでいることが良く分かった。1. 練習・演習方式（drill and practice mode）2. 個別教授方式（tutorial mode）3. 問い合わせ方式（inquiry mode）4. ゲーム・シュミレーション方式（game and simulation mode）5. 問題解決方式（problem solving mode）（以上Ⓐ学習形態による分類）1. フレーム型 2. 自動生成型 3. 発見型 4. データベース型 5. 人工知能型（以上ⒷCAI機能上の分類）

大阪大学産業科学研の発表は、Ⓐ5とⒷ5を統合しようという試みで、物理のドップラー効果の教授を例として展開した。沖電気の英会話教育用CAIシステム構築は、ELIZAの発展を、ホテルのフロントでの応答限定して構築しようとするものであり、自然言語をどう入力するかが課題であった。KDDの発表は、Ⓐ2とⒷ1の組み合わせによるもので、いかに現場の技術者に「楽しんで学ばさせるか」をテーマに発表されたが、装置マニュアルを立体的に教えるという点では、成功していると思えた。その他4つの発表があったが、豊橋技術大学の大岩元教授の「初等・中等教育におけるコンピュータ」は、「新しい読み書きそろばん」としての計算機にとって大切なのは、キーボード操作であり、これこそがコンピュータ・リテラシーであり、ただちにBASICを教育現場に取り入れることではないことを強調された。つまり、教育者自身の計算機経験が深まることこそが、導入の前段階にないと日本の教育は大混乱することを警告された。

その他

○蔵内数太先生を偲んで

蔵内先生は昭和63年7月6日に天寿を全うされ、逝去されました。明治29年に生れ91歳であった。先生は関西学院大学社会学部教授として、学部創設の昭和35年から昭和42年まで講義されました。教養の社会学、専門では文化社会学を担当され、大学院の講義は昭和55年（先生85歳）まで教えられました。死去するまで日本の社会と文化理論にたいする創造的・批判的な貢献をされた。先生は日本の数多くの社会学者を養成された。関学社会学部内で直接に教えをうけた者だけでも、定平元四良、萬成博、領家穣、倉田和四生、牧正英、西山美瑳子、森川甫、高坂健次を数える。先生は関西社会学会委員長、日本社会学会会長、日本学術会議会員であり、関学社会学部の誇るべき社会学者でした。著書として、「知識社会学」（昭和7年）、「文化社会学」（昭和18年）、「文化と教育」（昭和23年）、「社会学概論」（昭和28年）、「社会学増補版」（昭和41年）、「蔵内数太著作集全五巻」（昭和51～59年）を遺した。先生はつねづね、日本の社会学にとって国際化とは何かを学会が真剣に取組むべきであると提言された。日本社会学は国際社会学に対して何が貢献できるかを模索していた。関学に残った社会学者がこれらに答えるべき使命があると思われる。ここに謹んで御冥福をお祈りします。　（萬成　博）

執筆者紹介（掲載順）

何　肇発	中山大学教授
倉田和四生	関西学院大学教授
安和守茂	大学院社会学研究科博士課程後期課程
浅野　仁	社会学部教授
土肥伊都子	大学院社会学研究科博士課程後期課程
吹野　卓	大学院社会学研究科博士課程後期課程
ラルフ・ターナー	カリフォルニア大学教授
宮原浩二郎	社会学部専任講師
小林久高	大学院社会学研究科研究員
小笠原慶彰	大学院社会学研究科研究員
真鍋一史	社会学部教授

社会学部研究会々員

会長	遠藤惣一		
評議員	杉山貞夫	牧　正英	津金沢聡広
	春名純人	高田真治	対馬路人
会計監査	佐々木　薫	宮田満雄	
書記	岡部衛一郎		
名誉会員	青山秀夫	藤原　恵	本出祐之
	小関藤一郎	岡村重夫	嶋田津矢子
	杉原　方	清木盛光	栃原知雄
	（ABC順）		
普通会員	田中國夫	西尾　朗	定平元四良
	萬成　博	領家　穣	倉田和四生
	半田一吉	武田　建	森川　甫
	中野秀一郎	張　光夫	中山慶一郎
	J.A.ジョイス	船本弘毅	紺田千登史
	村川　満	西山美瑳子	安田三郎
	真鍋一史	山路勝彦	山本剛郎
	鳥越皓之	荒川義子	安藤文四郎
	浅野　仁	高坂健次	芝田正夫
	芝野松次郎	中西良夫	立木茂雄
	宮原浩二郎	正村俊之	

関西学院大学社会学部研究会会則

第 1 条　本会は関西学院大学社会学部研究会とよぶ。

第 2 条　本会は社会学および隣接諸科学の研究ならびに会員相互の交流を計ることを目的とする。

第 3 条　本会は上記の目的を達するために次の事業を行う。

1　機関誌「関西学院大学社会学部紀要」の発行。

2　研究会および講演会の開催。

3　研究叢書の刊行。

4　その他本会の必要と認める事業。

第 4 条　本会の会員は次の3種とする。

1　名誉会員　本会の特に推薦するもの。

2　普通会員　本会社会学部専任の教授、助教授、講師および助手。

3　賛助会員　以上の外申込のあったもの。

第 5 条　普通会員は年額19,200円、賛助会員は年額10,000円以上の会費を納めなければならない。納付済の会費は返還しない。

第 6 条　本会員および本学社会学部大学院生・学部学生は機関誌の配布を受ける。学生の講読費は昭和56年度入学生より年額1,600円とする。

第 7 条　本会に次の役員をおく。

1　会長（1名）は、社会学部長をもってあてる。

2　評議員（6名）は、普通会員の中から互選し、本会の運営に当る。

3　編集、会計、庶務の各委員は、評議員の中から互選する。

4　会計監査（2名）は、普通会員の中から互選する。

5　書記は、社会学部事務長に委嘱する。

第 8 条　本会役員の任期は2年とする。重任を妨げない。

第 9 条　本会会計年度は4月1日に始まり翌年3月31日に終る。予算・決算は総会の承認を得なければならない。

第 10 条　総会は年1回とし、本会の重要事項を議決する。臨時総会の開催を妨げない。

第 11 条　本会は事務所を本学社会学部におく。

第 12 条　本会会則の変更は総会の議決によらなければならない。

＜編集後記＞

本年度の社会学部紀要は，本年度末で定年退職者が会員の中から２名予定されているので，本号を入れて３回の出版を計画している。会員諸氏のご協力をお願いしたい。本号の編集を行っていた去る７月６日，名誉会員である蔵内数太先生の突然の訃報に接した。心からのご冥福をお祈りしたい。とりあえず本号では，萬成博教授にお願いし，蔵内先生を偲んでそのご報告をいただいたが，先生の長年にわたる学問生活については，本編集委員会としてもいずれ十分に準備の上，記事にしなくてはならないと考えている。　（杉山）

1988年９月20日　印刷
1988年10月１日　発行

編集発行人　遠藤惣一
発行所　関西学院大学社会学部研究会
〒662 西宮市上ヶ原一番町
関西学院大学社会学部内
電話(0798)(53)6111(代表)(内線) 4212

印刷所　尼崎印刷株式会社
〒660 尼崎市北大物町16—55
電話 (06)481—0707(代)

KWANSEI GAKUIN

SOCIOLOGY DEPARTMENT STUDIES

(SHAKAIGAKUBU-KIYO, KWANSEI GAKUIN DAIGAKU)

No. 57 October 1988

The Study Association of Sociology Department

KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY

Nishinomiya, Japan